

〇〇してみました世界のフィールド

屋根裏散歩者の夢

佐藤 浩司

民族建築学者（2019年3月に本館を退職）



屋根裏に潜り込んでみえた

スンパ島で調査中の勇姿（インドネシア、1987年）

世界各地のさまざまな建築について研究を積み重ねてきた筆者。今号はそんな筆者が、インドネシアの民家調査時の写真とともにエッセイをお届けする。屋根にその特徴があるインドネシアの民家から見えてきた住まいのあり方とは。

夢の世界と現実

子どものころの夢は忍者になることだった。小学校の行き帰りに忍者走りをしたり、忍術道具やら忍者食を作ってみるくらいは当時の子どもなら誰でもやっていたに違いない。テレビのなかの忍者たちは部屋にいながら後ろ向きにひよいと跳び上がると鴨居に足をかけ、するりと天井裏に消える。もちろんこれも真似をした。ただし、それは鴨居に足をかけるまで。家のなかでも天井裏や床下は忍者や物の怪の世界、まっとうな人間様の立ち入る領域ではないのである。と、子どもながらに感じていたのだろう。

日々の厳しい鍛錬を怠ったせいなのか、忍者にはなれなかったけれど、床下と屋根裏は仕事場になった。いや、泥棒ではありません。頭巾のかわりにヘッドランプをかぶり、手裏剣のかわりにシャープペンと消しゴムを

「非常識」の探究

なぜ、そうまでして苦渋に満ちた（？）屋根裏散歩を繰り返すのか？とおおかたの読者は訝るであろう。

未知の対象を前にして、その内部がどうなっているかを知りたい、と思いつくのは人間がホモ・サピエンスたる所以ではなからうか。医学の進歩も工学の発展もこの情念なくしては不可能だった。人類のはしくれたるわたしもご多分に漏れず無謀な好奇心にかられたものである。それは戦争中の『建築雑誌』を飾った「大東亜建築グラフ」のなかの民家写真であった。大学でまなぶ建築学の常識ではけっして実現できないであろう建築造形の数々。とんでもない形をした屋根を見て、その内部構造を知りたいという思いに、いや、魔が差したといったほうがよい。まだインターネットもない時代、本を探しても情報は得られなかった。自分の眼で確認するしか術がなかったのである。

裏から見る表の世界

ところで、屋根裏から覗く人間界ほど滑稽なものはない。屋根裏に宿るといふ祖先の霊（つまり俺様のことか？）にむけて儀礼や供養を繰り返すのはきまって男たちの特権だ。無意味な会議にあげられ、仕事と言いつつながら飲み歩く現代人と二重写しになって心がいたむ。そもそも祖先の霊が人間界に意思をつたえるはずもなく、要は誰かの主張をおすため祭りに上げられている傀儡にすぎないわけである。いい面の皮だ。さて下手な夢想もこのへんで。最後に散歩で得られた教訓をば。

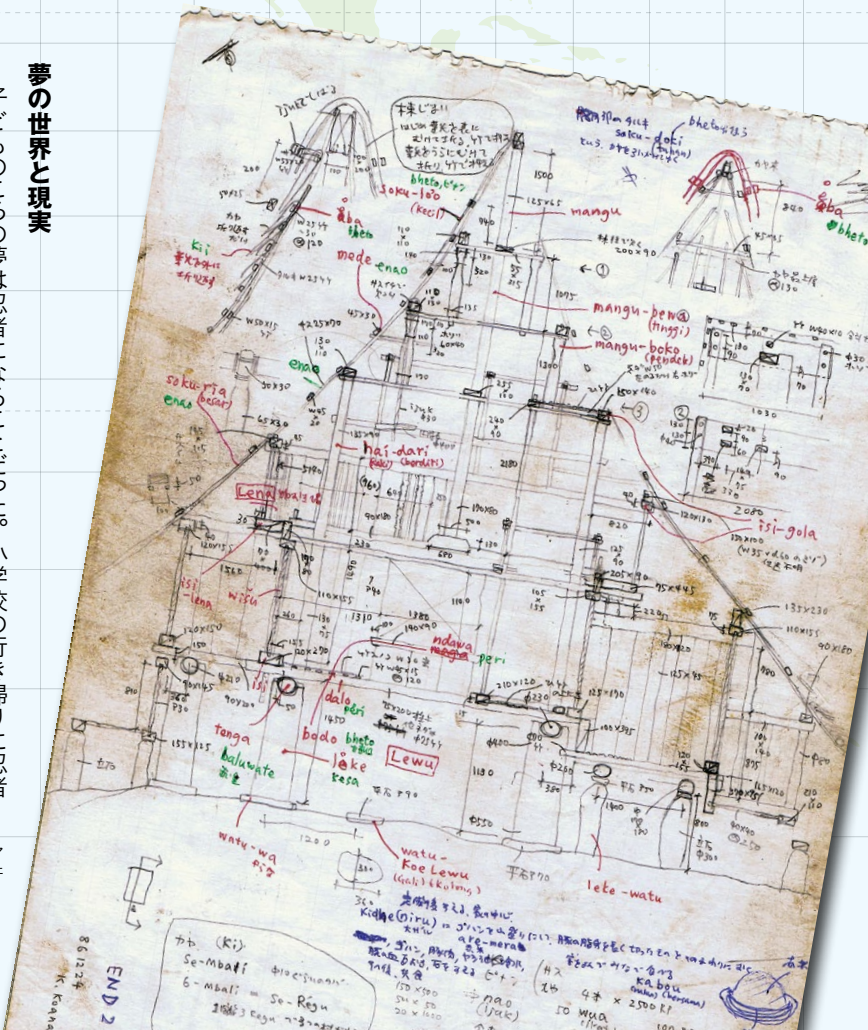
住宅はかならずしも人間が快適に住むためにあるのではないという教え。屋根裏、この得体の知れない空間こそ、人間中心に凝り固まった現代住宅が是が非でも取りもどすべき領域の象徴なのである。

片手に、もう片方の手には野帳、懐にコンベックス（メジャー）を忍ばせて、垂木を抱きかかえるように小屋組をよじのぼる。油断は禁物。草屋根の屋根裏は曲者が呑気に散歩できるほど快適な場所ではない。もうもくと舞いたつ埃の堆積をかきわけ、まとわりつく蜘蛛の巣をはらい、囲炉裏からたちあがる煤にまみれながら、したたる汗と涙と鼻水に耐えての図面採り。不安定な格好のまま部材の寸法を測り、ノートに記入するのがいわば忍者にかわるわたしの仕事だ。

足下の人間界からは、大学まで出たのに可哀想ねえなどとひそひそ声で話すが聞こえる。運悪く屋食時にぶつかると（食事の）相伴？とんでもない！、歓迎されざる客とはかり、火をおこした囲炉裏の煙にまかれて暗い屋根裏で一人涙にくれるありさま。それでも屋根裏に首尾よく侵入できればよし。祖霊の宿る神聖な空間、家宝を安置する不可侵の場所など一蹴されて、宝の山を目の前に退散するしかないこともある。



氏族の中心家屋サオ・リアのなかは屋でも暗い。屋根から洩れる太陽光とヘッドランプの明かりだけがたよりだ（インドネシア、フローレス島、1986年）



フローレス島オ族のサオ・リア（大きな家）の美測図。煤と汗（と涙？）の染みに注目（インドネシア、1986年）

3次元CGで見せる建築データベース「東南アジア島嶼部の木造民家」 <http://htq.minpaku.ac.jp/databases/3dcdg/>
本稿で紹介した家屋の詳細については、本館ホームページで公開中の上記データベースをぜひご覧ください。